

掲載に寄せて

福原裕二

2016年5月28/29日の両日、島根県立大学交流センター・コンベンションホールにて、「人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト『北東アジア地域研究推進事業』北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点スタートアップ学術会議」が開催された。ここに載録するのは、その学術会議の2日目に実施された「講演&座談会」のすべてである。

「講演&座談会」は、学術会議を浜田で開催することが決まった折、拠点代表者の岩下明裕教授から筆者に対して、「折角の機会だから、研究者向けの学術会合で終わらせたくない。市民の参加を仰ぐような形で、浜田らしいセッションを考えてくれないか」との要請があり企画されたプログラムである。私は、拠点の研究組織において、北東アジアの海洋問題を担当しているが、それに対する岩下先生流の激励と受け取った。

さて、浜田らしい学術セッションとはどういう会合であろうか。浜田の背後には北東アジアに開かれた海洋が存在する。その海洋＝日本海は、北東アジアの内海といっても過言ではない。そこには本来可視化されない境界が“二国間”の取極で張り巡らされており、そのため“多国間”に開かれた環（めぐ）りの海が十分に活用されるどころか、循環せず悲鳴をあげているような現実・現在がある。それは、地域統合はおろか地域を包摂するフォーラムさえ存在しないがゆえに、二国間に依った様々なレベルの関係によりどうにか域内対立をコントロールしている北東アジア地域の現状を象徴してはいないだろうか。そうであるとすれば、「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」を“事業”の中心研究テーマとし、「北東アジアにおける地域フォーラムの軌跡と展望に関する研究」を“拠点”の中心テーマとするスタートアップの学術会議において、海洋からのアプローチは場所柄も絡んで、格好のネタを提供することであろうと考えた。

こうして、北東アジアへと開催地（浜田）の背後に広がる環（めぐ）りの海をテーマに、具体的な北東アジアの諸課題の検討と構想をめぐらすことを目的としたセッションを企画することにした。その次に考えたのは、検討と構想を施すための方法論である。北東アジアの海をめぐる問題は、その地域を考究する研究者にさえ存外知られていない。そこで

やや福原の研究関心に偏りすぎのきらいはあるものの、日本をめぐる内外の漁業状況に国内でもっとも精通し、国境漁業の現状も熟知する濱田武士教授に「北東アジアの海をめぐる国境漁業の現状」と題する講演を行っていただくことを通じて、この分野の情報と問題の所在の共有を図ることにした。その上で、北東アジア研究の第一人者である和田春樹名誉教授、拠点リーダーであり日本のボーダー・スタディーズを牽引する岩下明裕教授、地元の漁業・水産業に熟達する、日韓民間漁業交渉における練達したネゴシエーターであり元日本海かにかご漁業協会理事である西野正人氏、浜田市水産業振興協会参与で水産資源の専門家である安達二郎氏に濱田教授を加えた五氏で座談を組み、そこでの議論をベースに拠点メンバーを巻き込んで、海の問題を題材にしつつ、北東アジアの諸課題の検討とこれを乗り越えていく構想を議論することにした。

結果的に言えば、ここに掲載した「講演&座談会」録を一読していただけるなら、こうした私の目論見はほぼ成功したことが理解いただけるだろう。のみならず強調すべきは、濱田教授の講演録は、平易ながらも日本を中心にした国境漁業の現状とそこでの課題を見事に総括しているという点で、学術論文に匹敵する水準が保たれており、国境漁業研究の現段階を確認する資料としても最適である。また、座談会では、濱田教授の講演内容に立脚しつつ、より現場に肉薄した現実・現在が掘り起こされるとともに、「北東アジアの難しさ」の本質が示唆的に浮き彫りとなっており、北東アジアの諸課題検討の下地を与えている（ということは、構想をめぐるすに至らなかった点は企画者として欲張りすぎたと反省しなければならない）。そのような意味で、本「講演&座談会」録は、スタートアップ学術会議の成果に止まらず、より大きな学術的意義を有しているということである。「北東アジア地域研究の挑戦」への意気込みを感じ取っていただけたら幸いである。

なお、「北東アジア地域研究推進事業」におけるそれぞれの拠点の活動内容、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点の研究活動については、以下のホームページをご参照いただきたい。

● <http://www.nihu.jp/ja/research/pj-ne-asia>

● <http://src-hokudai-ac.jp/northeast/>

（講演&座談会の開催とその記録の掲載にあたっては、JSPS 科研費 JP25285054の助成を得ています。また、平成28年度北東アジア地域学術交流研究助成金〔共同プロジェクト研究助成事業〕の助成を得ています）

（FUKUHARA Yuji）